

ティーチング・アシスタントと学ぶロシア語授業

山本 有希*

Learning Russian with a Teaching Assistant

YAMAMOTO Yuki*

This paper describes an educational approach utilizing teaching assistants (hereafter “TAs”) adopted at Toyama National College of Technology. The purpose of introducing TAs was to increase student speaking opportunities during class and enhance learning motivation. The subjects were 22 first-year students who had begun studying Russian as a second foreign language approximately one month prior, with four TAs participating in the classes. The majority of class time was devoted to reviewing previously learned content, incorporating game elements to create an enjoyable learning environment. Analysis of student questionnaires revealed that, overall, students were satisfied with the classes where TAs participated and felt they could perceive their own progress through these sessions. Therefore, the objectives of the classes can be considered achieved.

キーワード: ロシア語, ティーチング・アシスタント, 第2外国語学習

1. はじめに

本稿は、富山高等専門学校(以下、本校とする)で実施したティーチング・アシスタント(以下、TAとする)を交えた授業実践について報告するものである。TAを導入した目的は、授業内において学習者の発話機会を増やし、学習に対するモチベーションを向上させることである。対象とした学習者は、第2外国語としてロシア語学習を始めて1カ月程度経過した1年生22名であり、4名のTAを導入して授業を行った。授業では大部分を既習事項の確認に充て、ゲームの要素を取り入れることで「楽しい」授業になることを心がけた。学習者より採取したアンケートの分析では、学習者がTAとの授業に概ね満足していたことが分かり、本授業実践の目的は達成できたと考えている。

2. TAを交えた授業の設定と実施までの流れ

今回対象とした学習者22名は、入学から1カ月後

の5月初旬にロシア語を選択することが決定し、連休明けから本格的なロシア語授業の受講を開始した。例年よりも受講者数が増えたことに伴い、授業内で学習者間の会話の練習量が不足していたので、会話の機会を増やしたいと考え、TAを導入することにした。本校では、授業等において教員の補助的業務を担うことを目的として、専攻科生や本科5年生をTAとして活用できる制度があり、本稿での活動はこの制度を利用したものである。

TAには、本校専攻科国際ビジネス学専攻1年生4名を選定し依頼した。いずれも国際ビジネス学科卒業生で、本科在学時にロシア語を選択していた学生である。授業前に、準備の一環としてTAに対する事前指導を行った。TAには、授業の教案を示して説明し、この授業は1年生が楽しくロシア語学習に取り組むことを目的とするものであり、TA自身も一緒に楽しむという心構えで取り組んでほしい旨を伝えた。

TAを交えた授業は前学期に3回、後学期に1回実施した。6月中旬に第1回、6月下旬に第2回、7月中旬に第3回、1月下旬に第4回である。第3回及び第4回の直後に、それぞれ前期末試験と学年末試験が

* 一般教養科
e-mail:yamamoto@nc-toyama.ac.jp

予定されていたこともあり、各回が一過性のイベントで終わるのではなく、一生懸命取り組みれば結果に結びつくことを学習者に実感してほしいという狙いから、期末試験における口述試験を学習活動のゴールとして設定して学習計画を組み立てることにした。

学習計画を作成する上では、新しい学習要素はできるだけ持ち込まず、既習事項の確認と定着を目標とし、学習者が臆さず発話できるようにゲームを多く取り入れた。1 回目の授業実践は、本校に入学して2カ月

という時期での実施で、学習者間の人間関係が流動的かつ不安定な状況だったので、ゲームを通じて仲間意識を育むことを心掛けた。表1は全4回の授業の活動項目とその学習内容をまとめたものである。なお、本実践で用いているロシア語表現は、平素の授業で使用している教科書“**ПОЕХАЛИ! РУССКИЙ ЯЗЫК ДЛЯ ВЗРОСЛЫХ. НАЧАЛЬНЫЙ КУРС: УЧЕБНИК**”¹をベースに作成した。

表1 授業実践の活動項目と学習内容

回	活動項目	学習内容
1	<ul style="list-style-type: none"> 自己紹介① フルーツバスケット 班対抗名詞リレーゲーム 家族紹介① 	<ul style="list-style-type: none"> 名前をロシア文字で書いて名札を作成 果物名、季節名、血液型の単語練習 既習単語の和訳や名詞複数形 家族関係の単語と所有代名詞の学習
2	<ul style="list-style-type: none"> 家族紹介② 自己紹介②(名刺交換) 施設名称単語の練習 職業名単語の練習 	<ul style="list-style-type: none"> 架空の家族を作成し、紹介し合う 架空の人物の名刺を作成し、交換し合う ⇒職業名、趣味等の単語を使用
3	<ul style="list-style-type: none"> 家族紹介③ 班対抗動詞リレーゲーム 借り物競争 	<ul style="list-style-type: none"> 期末試験課題を想定した家族紹介 絵を見て、既習動詞の人称変化形及び目的語を答える(Что они делают?) 所有表現(У вас есть?)を用いた借り物競争
4	<ul style="list-style-type: none"> フルーツバスケット 「どこへ行くところですか?」 職業名と職場について カフェ店員との対話 ビンゴゲーム 	<ul style="list-style-type: none"> アイスブレイクと班分け 運動の動詞の復習・運動の動詞の活用と場所の表現の復習 価格を示す表現(数詞)、注文する表現の練習 数詞の聞き取り

3. 前学期における授業実践について

授業では、学習者の発話機会を増やすために、4つの班に分けてTAを一人ずつ配置した。TA一人当たり学習者5～6名となるので、単純に比較すると学習者は平素の授業の4倍以上の発話機会を得ることになる。同時に少人数のグループワークであるため気軽に質問できて、発話にかかる緊張感が少なくなることを期待した。

活動はほぼすべてを班活動とした。自己紹介、家族紹介、施設名称単語の練習、職業名単語の練習は、班の中でTAを中心に既習事項を確認して練習し、発表し合うというパターンを繰り返すというもので、落ち着

いて取り組める活動である。一方で班対抗リレーゲームと借り物競争は、名前の通り班で競うゲームで、遠慮せず積極的に行動することが求められると同時に、班員の協力や協調性が大切になる活動である。これらの班対抗ゲームでは、班が一体となってゲームに取り組ませるという意図で、「答えが分からなかったら自分の班に戻って仲間に答えを聞いてもよい」というルールにした。

4. 前学期分のアンケート分析

アンケートはMicrosoft Formsを用いて作成し、第3回目の授業終了後に、Microsoft Teamsにて学習者に配信する方法で実施した。4日間の回答期間を

設定したところ、学習者22名のうち19名から回答が得られた。以下にアンケートの回答の分析を記述していく。なお、アンケートの設問および回答の中に「補講」という語が用いられているのは、この授業が普通の授業とは別枠の「補講」時間帯を利用して実施したためである。

4.1 設問1, 2について

設問1は「TAと行った全3回の補講での活動の中から印象が良かったものを選んでください。(複数回答可)」であり、表2は回答を集計したものである。フルーツバスケットや班対抗単語リレー、借り物競争など、ゲーム要素が強い活動が上位を占めている。

表2 設問1に対する回答 (人)

フルーツバスケット	15
班対抗単語リレー(和訳, 複数形)	14
借り物競争	14
家族紹介	8
施設名称の練習	6
職業名の練習	4
動詞人称変化の練習	4
自己紹介カードを作って名刺交換	3

表3は、設問2「TAと色んな活動をしましたが、最も印象に残った活動を1つ上げ、その理由を教えてください。」の回答を集計したものである。ゲーム性が高い活動が好まれているという傾向は設問1と同様で、班対抗単語リレーが他を大きく引き離し1位になった。そこで、学習者がなぜこの活動を選択したのか理由を探るため、アンケートの回答文をもう少し細かく分析することにした。

表3 設問2の回答の分類 (人)

班対抗単語リレー	9
フルーツバスケット	2
名刺交換	2
家族紹介練習	2
施設名称練習	2
借り物競争	1
不明	1

「(TAが)ヒントをくれたりアドバイスをしてくれた」や「TAに優しく教えてもらいながらできた」というTAとの

コミュニケーションを理由に挙げているものは「TAとの交流」に、「瞬間的に話す練習になった」や「試験の役に立った」のように、活動が知識・技能の獲得に有益だったとするものは「知識・技能の獲得」に、「班対抗にすることで、協力して楽しめた」や「班のみんなとやったので仲が深まった」という記述は「仲間との協力」に、「困ったときに丁寧に教えてもらえた」や「TAが丁寧に一人ずつ見てくれて安心した」のように、個別対応を理由としたものは「丁寧な個別対応」という区分にした。また、「今までやって来た単語を思ったよりわかっていたのが嬉しかった」という回答は「知識・技能が身についた実感」とした。なお、文章中に複数の要素が含まれる場合は個別に数えたので、回答者数より回答数が多くなっている。

表4 設問2で「最も印象に残った活動」として回答した理由の分類 (人)

「TAとの交流」	8
「知識・技能の獲得」	7
「仲間との協力」	6
「丁寧な個別対応」	4
「知識・技能が身についた実感」	1

表4は、設問2の回答の理由部分の分類結果を集計したものである。「TAとの交流」と「知識・技能の獲得」についての記述が多く、学習者が本稿の試みを好意的に評価していることが分かる。これらに次いで多かったのが「仲間との協力」であった。学習者同士のコミュニケーションが深まる良い機会ととらえている回答が多かった。平素の授業では、多くの人とコミュニケーションをとることを目的として、授業毎にランダムに座席を決めている。授業中はペアでタスクに取り組むことが多いため、問題なくコミュニケーションが取れていると筆者は感じていたが、学習者にとっては不十分な状態であったということが分かった。本授業が学習者同士のコミュニケーションを深め、仲間意識を高めるきっかけになったのであれば幸いであるし、今後の授業を進めていく上で有益な情報を得ることができたと考えている。

他方、「最も印象に残った」理由として4名が「丁寧

な個別対応」を上げた。これはTAに対する純粋な感謝の現れであろう。しかしその反面、平素の授業でももっと丁寧に指導してほしいという要望の現れとも考えられる。ロシア語学習を始めて間もないこともあり、学習者は「自分の発音が正しいのか」や「自分の理解が正しいのか」といった不安を抱えている。このような学習者の不安という気づきを得たことは有益であった。

4.2 設問3について

設問3は「『TAとこういうことがしたかった』という活動があれば、教えてください。」である。回答は大きく3点に分類され、第1位はTAの海外留学、ロシア語の勉強法、本科生時代の話など、「TAとの(日本語による)交流」だった。同じ学校で学んでいても1年生と専攻科生にはほとんど交流がないので、1年生には大先輩と触れ合うまたとない機会となったようだ。

第2位は「ロシア語での会話」だった。この「会話」とは、テーマに制限のないフリートークを指していると思われる。確かに3回の授業では、与えられた単語や表現を練習して覚えて発話するということを主たる活動とし、TAとの自由な会話の機会は設けなかった。それは、この3回の授業を、学習者が達成感を得るという成功体験にしたかったからである。学習進度から判断すればフリートークは時期尚早であり、すぐに会話が行き詰まることが予想されたからである。とはいえ、ロシア語で会話をしたいというのは当然の要望なので、実現できる別の機会を探したいと考えている。

第3位は、伝言ゲーム、クロスワードパズルやクイズといった別の活動案の提案だった。なお、設問3の回答数の内訳は表5のとおりである。

表5 TAとしてみたかった活動 (人)

「TAとの交流」(海外留学, ロシア語の勉強法, 本科生時代の経験)	6
「ロシア語での会話」	5
別の活動案の提案(伝言ゲーム, クイズ)	1

4.3 設問4について

設問4は「TAとの授業はいかがでしたか? 全体的な感想を教えてください。」である。設問4の回答の分類を表6にまとめた。設問2と同様、文章中に複数の要

素が含まれる場合は個別に数えたので、回答者数より回答数が多くなっている。

回答文に否定的な記述はなく、「楽しかった」「楽しくできた」という感想が目立った。これに関しては、この授業が本当に楽しかったのだと言葉通りに受け取ってよいだろう。一方で、5名が「いつもの授業と違って楽しかった」という文脈で回答した。今回のような授業を継続して実施するのは難しいが、年間計画に予め組み込むことや、それぞれの活動を授業中のタスクとして計画的に実施する可能性を今後も探していきたいと考えている。

表6 設問4の回答の分類 (人)

「楽しかった・楽しく取り組めた」	13
「有益だった」	11
「TAとの交流」	10
「グループ・少人数」	5
「ゲーム」	4

4.4 設問5について

設問5は「TAに伝えたいことがあれば、記入してください。」で、TAへの伝言板として設けたものである。記述の多くはTAに対する感謝や憧憬であった。その中に「これから自分がどんなふうになるのか、不安が大きかったのですが、TAの方々とお話できたことで、少しでも未来の自分を想像できました。」という記述があった。不安についての説明が無いので、本校への入学に対する不安なのか、ロシア語を選択したことに対する不安なのか、不安の正体は示されていない。しかし、この学習者は先輩であるTAと交流したことで、ぼんやりとではあっても数年後の自分をイメージできたのかもしれない。TAは憧れの先輩として、1年生の不安の解消に一役買い、一種のロールモデルのような役割を果たしたのではないかと考えられる。これはTA導入を決めた時には想定していなかった効果であり、今後の活動を計画する上でも大事にしていきたい観点である。

5. 後学期における授業実践とアンケート分析

第4回目の授業実践は前学期と同様に定期試験前

に設定し、学習者が積極的に取り組むことを期待した。学習内容は表1に示したとおり、定期試験の範囲である運動の動詞の用法を中心とするとともに、普段の授業で定着を図るのが難しい数詞の表現を選んだ。いずれも、実践的な会話シーンを想定した対話形式のタスクとすることを心掛けた。アンケートは前期と同様の方法で実施し、22名全員が回答した。

5.1 設問1について

設問1は「今回も期末試験前の補講期間にTAとの交流を企画しましたが、この実施時期について教えてください」で、開催時期の是非を尋ねたもので表7に結果を示した。全員が好意的に捉えていて、定期試験の前に試験範囲の練習ができることが評価されていると思われる。

表7 設問1の回答結果 (人)

良かった	18
どちらかといえば良かった	4
どちらかといえば良くなかった	0
良くなかった	0

5.2 設問2について

設問2は、「7月にTAとの交流をした時から6カ月経過しました。自分自身のことを振り返って「成長した」とか、「変わった」など感じる点を教えてください。「特になし」は不可です。」である。この設問の意図は、学習者自身に、半年間でどんな成長があったのかを改めて考えさせて認識させることであった。表8は記述された回答を分類したものである。「できることが増えた」や、「できなかったことができるようになった」という意味の回答が大半を占めた。

表8 「できるようになったと感じていること」 (人)

対話ができるようになった	5
筆記体を書けるようになった	4
語彙が多くなった	3
格変化がわかるようになった	2
考えて話せるようになった	1

表8の通り、対話ができるようになったことを挙げた

者が多かった。これは語彙が増えていることと関係していると言える。日頃から「インプット無しのアウトプットは無い」と指導していることだが、学習者自身がこのことを改めて実感したのではないかと考える。

前学期に実施した第3回目の授業実践から、実質的な授業期間は3カ月半で、この間に学習が進んでいるので、ロシア語に関する知識や技能が向上しているのは当然として、この点を学習者自身がTAとの活動を通して実感することが重要であり、成長できたという実感がその後の学習のモチベーションになると考えている。

一方、ロシア語の筆記体を書けるようになったことを挙げた者もいた。最近では中学校までに英語の筆記体を学習していない学習者がほとんどだが、ロシア語では夏休みの課題として筆記体を習得させている。筆記体を初めて体験する学習者は、戸惑いながらも新鮮な感覚で習得に取り組んでいる。筆記体の学習を導入する理由は、ロシア語圏で授業を受ける際には、筆記体を使用されることが多いためである。本校ではロシア語圏への短期留学(3週間)制度があるので、その際の不利益を避けることを目的としている。

5.3 設問3について

設問3は、「本日の活動内容で、最も有益だと思った活動とその理由を教えてください」で、表9は活動名の分類である。

表9 最も有益だと思った活動名 (人)

カフェでの注文・会計のやり取り (価格の聞き取り)	11
職業名・職場を尋ねるやり取り (運動の動詞の活用と目的地の表現)	5
ビンゴゲーム(数詞の聞き取り)	2
TAとのやり取り	3
班活動	1

表10は、活動のどのような点について有益だと感じたのかを、アンケートの記述から抽出して分類したものである。数詞に関わる表現を挙げた者が最も多かったのは、数詞を読んで覚えるだけでなく、店頭での会計時の表現という、日常的かつ実践的な状況で練習で

きたことが理由ではないかと考える。普段の授業において同様のペアワークを試みた際は、学習者同士が発話内容に自信を持たず、現実的なやり取りにならない様子が散見されたが、この実践においては、学習者の発話内容に誤りがあってもTAがすぐに指摘し修正したため、安心して対話に取り組めたようだ。普段の授業の様子から、学習者が数詞に強い苦手意識を持っていることが明らかだったので、良い練習の機会となった。

表 10 学習項目としての分類 (人)

数詞の聞き取りや数詞の口頭表現	14
注文の口頭表現	3
運動の動詞の活用	2
名詞の格変化の練習	1
その他	2

一方で、数詞は定期試験の範囲ではなかったにも関わらず学習者の関心が高かったことは興味深い。試験をゴールにすることで学習意欲を高めたいという筆者の意図や試験そのものとは関係なく、学習者達がロシア語の習得に意欲を持っていることを示しているものと考えられる。単純に、何かができるようになることは嬉しいことである。今後は、そういった喜びを学習の中で感じられる瞬間をできるだけ多く作り出すという視点を持って、学習計画を作成していきたい。

5.4 設問4について

設問4は、「本日の活動内容で、最も楽しかった活動とその理由を教えてください」で、表11に結果を示した。

表 11 最も楽しかった活動 (人)

ビンゴゲーム	12
フルーツバスケット	6
職業名と職場名を用いた練習	2
カフェでの注文・会計	1
その他	1

ビンゴゲームやフルーツバスケットなどのゲームが上位を占めたのは予想どおりだったが、「楽しかった」以外に単語や数詞を覚える良い機会になったという意

見が多く、学習者が「楽しく学ぶ」という意図をよく理解していると言える。今後は短時間でもいいので、普段の授業に継続的に取り入れることを考えていきたい。

6. おわりに

本授業実践では、学習者が積極的にロシア語表現に取り組み、学習活動における達成感を得ることを目的として、TAを導入した少人数の班活動を設定した。事後アンケートの分析から、学習者にとって4回の授業がいずれも有益で満足のいくものであったことが確認でき、目的は達成できたと言える。同時に、学習者同士の人間関係を深める機会になったことは収穫であった。また、試験に関わるか否かは別として、学習者に実践的なロシア語表現を習得したいという意欲があることがわかったのは大きな収穫であった。今回得られた知見を活用して、学習者の意欲を引き出すような授業を実践し、引き続き授業改善に取り組んでいきたい。

アンケートには、TAが丁寧に(個別に)対応してくれたことについての記述が多かったが、それは普段の授業に対する要望であるとも考えられる。今後は学習者が抱えているロシア語学習への不安や不満に寄り添い、解消できるよう誠実に向き合っていきたい。

そして今回TAを務めた専攻科生を対象としたアンケートを実施できなかったが、授業後に「1年生と触れ合えて楽しかった」「自分も勉強になった」などの感想を寄せてくれた。1年生のロールモデルとなるだけでなく、1年生との触れ合いが専攻科生にとっても学びの場になっていたと思われ、今後も専攻科生の協力を得る機会を作りたいと考えている。

また、学習者によるアンケート分析の結果から様々な知見を得ることができたが、設問自体が大まかだったためか、分析する際に判断に悩む回答があった。今後は、回答者の心理が明らかになるようなアンケートになるよう設問を工夫したい。そして、今回は4回の実践に対して、アンケート採取が2回のみになったことは大きな反省点である。今後はより密に授業計画を作成したい。

7. 謝辞

学業に忙しい中、快くTAの要請に応じてくれた専攻科生の土肥南夏さん、野田悠月さん、藤井未悠さん、宮野波音さんに心から感謝いたします。どうもありがとうございました。

8. 参考文献

- (1) Станислав Чернышов, Алла Чернышова,
“ПОЕХАЛИ! РУССКИЙ ЯЗЫК ДЛЯ ВЗРОСЛЫХ.
НАЧАЛЬНЫЙ КУРС: УЧЕБНИК”, Златоуст (2019)